

とつておきの 奈良

Vol. 37

いもまち
大和高田市本町・市町地区

町家に近代建築に 江戸からつながる 商人の町

古代からの主要街道・横大路沿いにあって栄えたこの地は、江戸・慶長5年(1600年)に「高田御坊」の名で親しまれている専立寺が建立されて以降、寺内町として発展した商いの町。庇護を求める商人たちは「寺の瓦が見えるところで商いがしたい」と、時流に合わせて居住まいを変えながら商いを続けてきました。

大和高田が木綿の産地であったことから、この地は江戸期から「いとへんの町」でもありました。明治から大正、昭和と続く紡績業の発展にともない、隆盛時には南北約400m、東西約200mの地区内に3つの銀行があつたほど。うち2つの銀行は今も現存。大正口マンや昭和モダンが薫り立つ洋館は、町家が連なる町並みのアクセントとなっています。一方、伝統的な



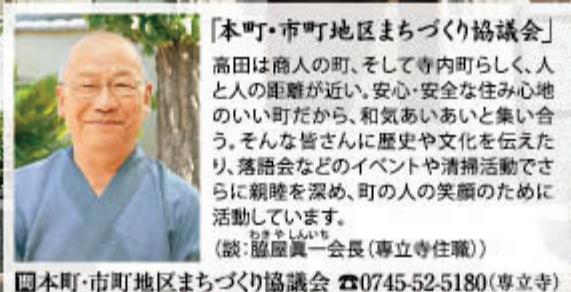
「だんじり」
社屋な細工を凝らした「本町番」のだんじり。もう1基の「高田地車」とともに明治初期のもの。今年の秋祭りは10月7日(日)・8日(祝)に行われる。

町家も、多くは往時の姿を留め空き家はほとんどなし。変わらぬ商いの営みと寺内町の暮らしやすさを物語っています。

そんな町を盛り上げるのが、寺内町ならではのお祭りです。今も昔も集いの場であり続ける専立寺のお盆万灯会では、境内夜店に子どもたちの歓声があふれます。秋祭りでは本町、市町から一基ずつ出るだんじりが、天神社から町内を曳行。県外からの人出も多く、往時のぎわいで町の人の心を一つに結びます。



「村島邸」
江戸期建築。長州藩との交易にも尽力した豪商、村島邸。尊王攘夷派の志士、梅田雲濱の妻の実家でもある。



「専立寺」
大門横の太鼓楼は寺内町のシンボル的存在。時計が普及する明治までは太鼓が時を知らせ、行事の開始を告げた。

【森川商店本社ビル】

大正末期のレトロな洋館は旧大和貯蓄銀行。当時のままの優雅な姿を見せる。吸収合併後、昭和50年頃まで南都銀行が営業。現在は森川商店本社ビル。